

# ロシア国家の起源—エトノスの視点から

川 端 香 男 里\*

The Origin of Russian State  
—from a viewpoint of “ethnos”

Kaori KAWABATA\*

## はじめに

今世紀の始めに文字通り「世界を震撼させ」(ジョン・リード), 理想社会の実現が成るか人々に期待を抱かせたソヴィエト連邦という国家体制は1991年末にあっけなく崩壊してしまった。イデオロギー, 政治, 経済という面からこの国を研究してきた多くの専門家たちが予想もしなかった事態であった。共産党の鉄の規律とソ連の最も誇る「ハイテク」技術であるスパイ技術を駆使したKGB(国家保安委員会)の統制下にありながら, この国は70余年しかもたなかったのである。「すべての権力は腐敗する。絶対的な権力は絶対に腐敗する」というイギリスの政治学者アクトン卿の格言がこれほどあてはまった国はない。

他方, 無神論を国是とする国によって徹底的に弾圧されて来たロシア正教は, 1988年のキリスト教受洗千年祭を大きな節目として力強くよみがえって来た。70余年のソ連邦の歴史は千年におよぶこの国の歴史のほんの一部だったのであり, ソ連崩壊はいわば「永遠のロシア」の真のすがたを改めて人々の前に示したのである。この国の過去についても, そして将来について考える場合にも, 従来のソ連研究では無視されがちだったロシアの歴史, 風土, 民族性, エトノス, 「ロシア的なもの」というさまざまな問題について考究する必要があるが出て来た。振り返ってみればソ連研究はある意味ではきわめて単純化されていた。この体制を理想社会であると考えた立場からはイデオロギーだけを問題にしていればよかったわけであり, 「悪」の体制と見ていた人々にとっては, この体制を成り立たしめていた権力構造だけを考えていればよかったからである。本稿においてはロシアという国の成り立ちに民族, エトノスの視点から光をあてて, 従来無視されて来た領域の研究にいささかでも資したいと思う。

## スラヴ人とロシア人

スラヴ人はヨーロッパ最大の民族集団であり, 古来きわめて精力的な民族であった。ところが

---

\*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

ロマン主義以降の民族主義的イデオロギーの影響で「スラヴ」というと、チャイコフスキイやドヴォルジャークの音楽や、アルフォンス・ミュシャ(ムハ)の歴史画などを思い浮かべて、沈鬱な情熱をたたえた民族というイメージがもたれることがある。がっしりした体格で我慢強く、人づき合いがよいがちょっと暗い性格であるという特徴付けがなされたりもする。スラヴ人は森林伐採と焼畑による農業と牧畜を生産の基本とする一方、狩猟・漁撈も得意であり、森の住民であるため早くから養蜂の技術にも通じていたから、忍耐強い人が多くいて当然であるが、これらの条件をみたさないスラヴ人はもちろん数多くいるし、またこれらの条件をみたしたからと言って、スラヴ人であることが証明されるわけではない。

はっきりしていることは、スラヴ人とは印欧語のひとつであるスラヴ語を話す民族であるということである。この民族は、西はヴィスワ川中流域、北はプリピャチ川、南はカルパチア山脈、東はドニエプル川中流域にまたがる森林、草原、沼沢におおわれた地方に住んでいたらしい。今日の地図で言えばポーランド、ベラルーシ、北西ウクライナの一部に該当する。今、スラヴ語はロシア語、ポーランド語、チェコ語などに分化しているが、「原スラヴ人」は通例スラヴ共通語(スラヴ祖語)と呼ばれる言語を話していたと考えられる。再構されたスラヴ共通語と他の言語とを比較検討してみると、有史前にスラヴ人がどのような民族と接して暮したことがあるかということがかなりわかってくる。(たとえば、紀元前3000年の小アジアの印欧語であるヒッタイト語や、紀元前4000—3000年前に東トルキスタン(新疆)に移動した印欧語の一族のトカラ語に似ているところが多い。ロシア平原の先住民であるスキタイ、サルマタイのイラン語との接触は特に強く、長いこと東方の同居者であった民族のバルト語、フィン・ウゴル語、後にロシア平原の支配者となったゴート人の言語との関係はさらに深かった。)

スラヴ共通語の語彙の研究からは、スラヴ人が強固な家父長制氏族社会を守っていたこと(「家族」単位を示す言葉はまだなかった)、山が少なく、森林、河川、沼沢の多い地方で農業を営んでいたことなどがわかる。川魚の名はきわめて豊富であるが、海に関する語彙は貧弱だった。(スラヴ人にとって、海(more)は中性名詞である。中性形で表現された海は何かを生み出す力に欠け、抽象的でよそよそしい感じを与える。海洋に面した国々が海を母、女性のイメージでとらえるかのように、女性形で表現しているのとは異なる。これに対し、「母なるヴォルガ」の表現に見られるように、スラヴ圏では川が女性形となっている。)

## スラヴの拡散

原スラヴ人に最初に強力な文化的影響をおよぼしたとされる民族は、南ロシア草原に君臨した騎馬遊牧民族のキンメリア人(紀元前1000年—700年)、スキタイ人(紀元前700年—200年)、サルマタイ人(紀元前200年—紀元200年)で、いずれもイラン系の民族であった。宗教・儀礼関係の語彙(神、天神、太陽神等々)がイラン系言語と似ていることによっても、スラヴ人とイラン系民族との深い関係をおしはかることができる。紀元後2世紀頃になると、ゲルマンのゴート人がスラヴの

「原郷」を突っ切る形で通過して黒海沿岸の南ロシア平原に現われる。この移動でスラヴ人は東西に分断され、同時にスラヴの文化はゴートの大きな影響を受けることになる。さらに紀元370年頃、フン族がカスピ海、クリミアを経て黒海沿岸に出現しゴート人を駆逐した。追うフンも追われるゴートも西のローマ帝国領をめざし、これがきっかけとなって民族大移動が起こる。

この大移動は比較的土着的だったスラヴ人をもより動かした(土着とか、原住民という表現は「太古から、いつもそこに住んでいた」という意味に解釈されることが多いが、「民族」というものが存在しなかった時代の原始的集団でも移動、移住することは頻繁にあったのであり、土着民、原住民という概念は、歴史的・相対的である<sup>1)</sup>)。民族の移動にも段階があり、移動の仕方にも個性があった。大がかりな移動を行なったゲルマン人、ほとんど土着的と言えるフィン・ウゴール、バルトなどの間にあって、スラヴ人は移動するというよりは拡散した。居住地は捨てず、そこを中心として比較的まとまりのある同心円内の地域に大半が位置する形となった。このことが後に18世紀以降におけるスラヴ民族意識の興隆、20世紀における社会主義圏の形成ともかかわってくることになる。

ゲルマン人が移動したあとをねらって西へ移動したのがポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人などの西スラヴであり、東から南ロシア平原を通してヨーロッパに向った遊牧民に追われたりこれと協力したりして移動し南に落ち着いたのが南スラヴ(ブルガリア人、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人など)である。

フン族は西方で巨大な帝国を作ったが、やがてアッチラの死後崩壊する。その後に東方からやって来たのが、強大な帝国(558—650)を南ロシアからドナウ川地方にかけて築き、イタリアにまで攻めこんだモンゴル系遊牧民アヴァール人であり、7世紀にヴォルガ川下流を中心に強大なハザール・カガン国を作ったトルコ系のハザール人であった。<sup>2)</sup>正にこのような東方からの圧力に抗して東方と北方に向って居住地をひろげて行行ったのが東スラヴ人であった(この頃はまだ、ロシア、ベラルーシ、ウクライナという分化はなかった)。

## キエフ・ルーシ

ロシア最古の年代記に、『過ぎし年月の物語』と呼ばれる書物がある。11世紀のなかば頃からキエフの洞窟(ペチェールスキイ)修道院の修道士たちによって書き継がれ、12世紀初頭、学僧ネストルを中心に最終的に完成された年代記である。その冒頭に「ルーシの国はいずこより来たりしか、そも初めにキエフに公として君臨せしものは誰なるか。また、いかにしてルーシの国は興りしか。こはその過ぎし年月の物語なり」とあるために、先述の『過ぎし年月の物語』という名をこの書物は与えられることとなったが、『原初年代記』、『ネストル年代記』と呼ばれることもある。

この年代記によれば、この地に分散していた種族はポリャーネ族[「ポーレ(野原)の人」の意。キエフの南、ドニエプル中流域の豊かな地方に住む]、ドレヴリャーネ族[「森の人」の意。キエフの北方の森林地帯に住む]、イリメニ・スロヴェネ族(ノウゴロド族)、ポロチャーネ族、クリヴ

イチ族、ドレゴヴィチ族、セーヴェル族、ブジャーネ族(のちにヴォルイネ族)、ラジミチ族、ヴァチチ族などである。このスラヴ諸族に隣接する民族として、フィン・ウゴール系、バルト系の種族がいた。やがてスラヴ人の人口が増加し町が築かれるようになると、種族・部族よりも町への帰属・所属関係が重要になり、町を中心とした改編・再編が行われるようになった。たとえば二つの町を作った種族は二つの共同体に分割される反面、町をもたない種族は他の種族に吸収・合併されることとなり、ノヴゴロド、ポーロツク、スモレンスク、チェルニーゴフ、ペレヤスラーヴリ、キエフという六つの町を中心にスラヴ諸族は再編されることになった。

『過ぎし年月の物語』には、「ヴァリャーグ〔ノルマン人〕からギリシアへの道」があったと記されている。これはスカンディナヴィア(主としてスウェーデン)からギリシア(ビザンティウム)とをつなぐ水路による通商路であり、バルト海と黒海を結んでいた。前述の六つの町はいずれもこの交易路上かその周辺にあった。この水路はその開拓者スウェーデン系ノルマン人によってアウストゥルヴェーク *austrvegr*〔東方路〕と呼ばれ、別名「琥珀の道」とも言われ、この時代「絹の道」に劣らぬ重要な交易路であった。

この水路は河川と湖をつないで出来上がっているが、二か所つながっていないところがあって、そこでは二つの水路を結ぶ最短距離の陸地を、軽い舟であればかつぎ、重い船であれば丸太を並べて曳いて運んだ。これを連水陸路〔ヴォローク〕と呼び、この手段によってロシア中に交易路を広げることができた。

当時東スラヴ人の住んでいた地域は、東北はブルガール、東南の広大な地域はハザールと、いずれも強力なトルコ系民族によって占められ、東スラヴ人は強い圧力を受けていた。一方、9世紀中葉には、ネヴァ川、ラドガ湖を起点にして南北に流れるドニエプル水路を支配し、掠奪と交易を行っていたヴァリャーグ人(スウェーデン系ノルマン人)は、スラヴ人たちとそれと隣接して住むフィン・ウゴール系種族を攻撃し貢納の義務を課した。『過ぎし年月の物語』によれば、やがてスラヴ人は貢納を拒否し、ヴァリャーグ人を海のかなたに追放し、自分たちで国を治めてみたがうまく行かない。というのは、氏族的部族を単位として慣習法によって共同体を規制していた古スラヴ人は、強力な軍事組織を編成し、諸部族を緊密な統合体にたばねる政治的力には欠けていて、「法も正義もない状態」で部族どうしが対立し内戦が始まる。そこで部族間の協議が行われ「われらを統治し、法に従って裁いてくれる」公(クニャーシ)をさがすことにし、フィン・ウゴール系の諸族をも伴ってヴァリャーグ人のもとに行ったということになっている。(年代記作者はヴァリャーグ人が自分たちをルシと呼んでいたと書いている。これがルーシ、つまり後の「ロシア」の語源とされている。またヴァリャーグ人の中にはゴートあるいはスヴェイトと呼ばれていたものもいると年代記では語られている。)

『過ぎし年月の物語』の6370年〔ビザンツ世界開闢紀元〕、つまり西暦862年の項によれば、スラヴ人たちは「われらの地は広大にして豊なり。されどそこには秩序なし。来りて君臨し、われらを統べよ」とルシに要請し、この「招請」に応じてリュウリックを長とする三人の兄弟がルシのすべてを引き連れて到着し、当初は北方ノヴゴロドを支配した。リュウリックはなかば伝説的

な人物であるが、その遺子イーゴリ(スカンディナヴィア語のIngvarから派生)とその後見人のオレーグ(Helgeから派生)がスモレンスクからキエフ(スカンディナヴィア語で言うケーヌガルド)を占領した。オレーグはキエフを「ルーシの町々の母」とであると宣言した。時に西暦882年、これがキエフ・ルーシあるいはキエフ公国の始まりとされる。

年代記作者であるキエフ洞窟修道院の修道士たちが描きだしたロシアの建国伝説はその後さまざまな論議を呼んだ。キエフを首府とする東スラヴの国家形成においてノルマン人が決定的役割を果たしたと考えるのがいわゆる「ノルマン説」と呼ばれる学説で、ソ連時代には実質的にこの考え方はタブーとなっていた。反ノルマン説には18世紀のロモノーソフ以来、多くの支持者があり、「ルーシ」の語源のスカンディナヴィア起源を否定するところまで行ったが、その説にはスラヴ説、ハザール説、フィン説、ゴート説などがあるものの、どれひとつとして確かなものはない。ノルマン説、反ノルマン説は長い論争を今日までくりひろげて来たが、年代記の記述をくつがえすような資料はない。文化的・経済的には東スラヴの方がノルマン人社会よりも進んでいたことは確かなようであるが(年代記には前述のように「広大にして豊かな」ロシアの記述がある)、すぐれた軍事技術・統治技術をもっていたノルマン人のリーダーシップが発揮されて国家の形が作られたと考えるのが自然である。この時代にノルマン人がフランス、イギリス、そして地中海に王国を築いたことを考えあわせれば、ロシアにおいて相似た事業を行なったことに不思議はないし、一部のロシア人が考えるように「国辱的」なこととも考えられない。要は、9世紀から11世紀にかけて、ヨーロッパ中世世界の成立にノルマン人が大きく寄与したという全ヨーロッパ的視野からロシアの建国も見るべきである。<sup>3)</sup>(ついでながら言えば、ノルマン人はどの場合でも彼らが支配した土地の民族、その文化、言語に同化している。ルーシの南北にわたって流れる水路を支配し、スラヴ人の地域連合的政治組織の形成にかかわったノルマン人は次第にスラヴ人に同化していき、それに伴いルーシはロシアを意味するようになり、その国民は民族的な起源を問わずすべてルーシ人と呼ばれるようになったのである。)

キエフは前述の通り、二つの主要交易路(絹の道と琥珀の道)の交わる場所に位置していたから、平和時にはこの国の繁栄ぶりは当時の人々の驚きをさそうほどであった。ヤロスラフ賢公(在位1019—54)の時代がこの国のピークであったが、その領土は大体テキサス州とニューメキシコ州をいっしょにした位の大きさと、西スラヴ、南スラヴの小国にくらべるとかなり大きな規模だったと言える。ところが南方から遊牧民の侵入に苦しめられる一方、リューリックに始まるとされる公の一族の内紛内訌のために、国の力は次第に弱められて行った。長子相続制が確立されておらず、父が死ぬとその兄弟、息子の間に争いが起き、しばしば大がかりな殺し合いとなった。(この伝統はロシアでは貴族社会にその後も長く生き続ける。子供全員が父の称号をつぎ、財産も特に指示がなければ分割されるので、子だくさんの貴族は限りなく貧乏になった。ロシアの小説を読むと、やたらに公爵や公爵夫人が出て来るのは、この相続制のせいである。)

## モンゴル・タタールのくびき

ヤロスラフ賢公のあと、キエフ・ルーシでは180年間に80回も内乱が起きる。しかし、『過ぎし年月の物語』によれば、「書物に心をひかれ、昼も夜もしばしば書を読み耽り、あまたの写字生を集め、ギリシア語からスラヴ語に翻訳させ」、キエフ・ロシアの第二の文化の黄金時代を築いたと言われるこのヤロスラフにしても、兄弟との血みどろの戦いを勝ち抜いたのち、単独でロシアを支配することができたのである。

ロシア東南部ステップ地帯にはさまざまなアジア系の遊牧民族が入れかわり立ちかわり現れてロシアをおびやかしたが、建国以後、最大の敵はトルコ系の遊牧民ペチェネグ人だった。リューリックの子とされているイーゴリ(在位912—45)は、ヴァイキングの血は争えず、典型的な戦士であった。その子スヴァトスラフ(在位945—72)も好戦的で、東の強国ハザールを倒し、クリミアを領し、ブルガリアにまで遠征したが、このペチェネグとの戦いで命を落とした。(ペチェネグ人は彼の頭蓋骨に金を張って杯を作り、それで酒を飲んだと年代記にはある。匈奴の実質上の建国者である冒頓単于を継いで即位した老上単于が、月氏の王を殺してその頭骨で酒器を作ったことはよく知られているが、敵の頭骨でいわゆる鬬饕杯を作る習俗はスキタイにはじまり、匈奴に引き継がれ、遊牧騎馬民族に広くひろまったと考えられる。)このペチェネグはヤロスラフによって撃滅されるが、すぐに別のトルコ系遊牧民ポロヴェツ人(キプチャク族、あるいはクマン人)が現われ、約150年間にわたってキエフ・ルーシをおびやかした。そは脅威はルーシ諸公の内紛が激しくなるにつれてより深刻になって行った。

ポロヴェツの侵攻に対しロシアの支配者もたびたび反撃したが、1185年にポロヴェツに対してなされた遠征は、『イーゴリ軍記』という作品に描かれることとなった。この年は奇しくも壇の浦の合戦と同じ年である。はるかにへだたった二つの国で同年に行われた戦争は、『平家物語』と『イーゴリ軍記』という中世文学の世界的傑作を二篇生み出すことになる。われわれはこの二つの作品を通して二つの国の「中世」のあり方、国民性の特質を期せずして比較することができる。(とはいえ、ロシア人と遊牧民の関係は敵対関係に終始したわけではない。遊牧民のなかにもロシア人の間に入って定住するものもいたし、この時期キエフ・ルーシの公の家に嫁いで来た外国の王女のうち最も数が多いのはポロヴェツ人であった。レフ・グミリョーフらはステップを舞台にしたアジア系の諸民族とロシア人の深い複雑な結びつきを重視すべきだと主張しているが、支配層の婚姻関係からみても相互の結びつきは強かったと言える。)

一方ロシア人はより安全な地を求め、天然の避難所である森をめざし、北方へ北方へと移動して行った。北のノヴゴロドは既にバルト海貿易の拠点として栄えていたが、それと結ぶ形で北方の都市ウラジーミルが抬頭して来る。ステップを経由して黒海に至る通商路が生命線であったキエフの命脈はつきようとしていた。外見上まだ繁栄を保っていたキエフ・ルーシの破局は突然にやって来た。これ以後のロシアの歴史は、しばしば予測もつかない突然の破局に見舞われることになる。イヴァン雷帝死後の大動乱、ロシア革命、ソ連崩壊など、いずれも人々の予測を越えた

突然の出来事であった。

1223年、南ロシアのステップに見慣れぬ騎馬軍団が姿を現わした。新たな侵入者はモンゴルの騎馬隊であった。チンギス・ハンの長子ジョチ（ジュチ）は西北ユーラシアを委ねられており、いわゆるジョチ<sup>ウルス</sup>国はやがてシル川の北、ウラル山脈の東南に達し、ついでポロヴェツ（キプチャク）諸族の住む「キプチャク大草原」に入った。ポロヴェツのコチャン・ハンからのモンゴル軍についての情報が娘婿のガーリチ公ムスチスラフにもたらされ、彼の呼びかけで結成された南ロシア諸公軍とポロヴェツの連合軍がカルカ川付近でモンゴル軍と戦うが大敗を喫した。この時キエフ・ルーシが経験した戦争は『イーゴリ軍記』に描かれているような「騎士道」的な戦いではなく、まったく別のルールで行われた戦争であった。ポロヴェツとの戦いは一種の競争的共存の中での戦争であったが、今度はまったく様相が変わっていた。しかしモンゴルとの最初の戦いはモンゴルにとっては単なる偵察行動で、ロシア人も南部の局地的な出来事としてあまり関心を示さなかった。

ジョチの子バトゥ（拔都）はやがてポロヴェツ（キプチャク）諸軍団を叩き、その多くを吸収して巨大な軍団を作り上げ、ヴォルガ流域のブルガールを攻め、ついで10万人を越えるといわれる軍勢で東南ロシアのリャザン公国を襲った。自分の領地を守ることのみを考えていた他の諸公は援軍を送らず、5日間にわたる激戦の後、リャザンは陥落した。分裂と反目の中にあったルーシでは連合した統一軍は結成されず、諸公国はつぎつぎと各個撃破された。大公の居住地ウラジーミルをはじめとする北部も、キエフを中心とする南部も征服された。いわゆる「タタールのくびき」の時代が始まった。

## タタールについて

「くびき」とは漢字では首木とも輓とも書かれるが、牛や馬に車をひかせるとき、その首につける横木のことで、ロシア人はモンゴル支配の時代を、くびきをつけられた牛馬にたとえたのである。一方、タタールは元来、中国では韃靼と呼ばれたモンゴル系遊牧部族の呼称であった。モンゴル系の大小の諸部族はモンゴル高原で勢力争いをくり返していたが、その中でタタール部は最有力の集団だった。このタタール部から攻撃され半ば支配下の状態におかれていたモンゴル部に、12世紀末のことテムジン（チンギス・ハン）が現われてから形成は逆転し、いわゆるモンゴル・ウルスの成立とともに、モンゴルは部名から民族名になったのである。ところが中国ではモンゴルのことを韃靼と呼ぶ習慣が残っており、西側もタタールから由来した「タルタル」をモンゴルを指す名として用いた。

この呼称には若干の補足が必要である。キエフを壊滅させたモンゴル軍は1241年4月にシレジア（シュレジエン）のリーグニツ（レグニツァ、当時の地名はワールシュタット）でポーランドとドイツの騎士団軍二万を撃破し、ハンガリー、クロアチア、ブルガリア、ワラキア、モルダヴィアなども攻撃され掠奪を受けた。恐怖におののいた13世紀のヨーロッパ人たちはラテン語で地獄を表

わすタルタルスとタタールを結びつけ、モンゴル人をタルタルスと呼んだ。近代西欧語はいずれもこのラテン語から派生したTartarを用いている。本来のタタール族は力を失って行ったが、タタールの名称はやがてモンゴル系遊牧民族だけではなく、モンゴル高原に入って来たトルコ系諸族も含む遊牧騎馬民族の総称となった。ロシアの歴史に即して言う、タタールとはモンゴルに従って来たトルコ系諸民族のことである。ヴォルガ・カマ川流域にブルガール国を作って土着したトルコ系民族も含まれる。アルタイ山以西の土地を領有することとなったジョチ・ウルスではモンゴル系のわずかな中核のもと、トルコ系のキプチャク族遊牧民が多数を占め、トルコ化、つまりタタール化が進んだ。ジョチ・ウルスがキプチャク・ハン国と呼ばれることがあるのはこのためであるが、モンゴルの作った国家は、かつてのヴァイキングの場合と似て、人種・民族を超えた集団でもあった。さて、ジョチ・ウルスは急速にタタール化し、タタール人がロシアの支配者となったから、西側ではロシア人をタタール人と同一視する傾向が見られた。「ロシア人を一皮むけばタタールが出て来る」と諺にまで言うようになった。

### モンゴル支配の歴史的意味

モンゴル支配のロシア史への影響については、歴史家の見解が大きく二つに分れる。意見の分れるポイントは二つある。まず第一にモンゴル支配がロシアに重大な永続的影響を与えたかそれとも一時的だったかということ、第二にその影響が肯定的であったか否定的であったかということである。

モンゴルの影響を長期にわたる決定的なものと考えるのが、ヴェルナツキイに代表されるユーラシア学派である。ロシア史はヨーロッパからアジアにまたがるユーラシア平原で展開したというのが彼らの考えで、モンゴル支配以後のロシアはアジア遊牧民の専制的な帝国の継承者であるというのである。自由の原理に立っていたキエフ・ルーシが、モンゴルの影響下、国家に服従するという原理の上に築かれた専制的なモスクワ国家に変質したということになる。「専制」はこの場合、否定的にとらえられているが、モンゴルの永続的な影響を肯定的に見る立場もある。プーシキンの先輩にあたる詩人・小説家カラムジーンは晩年に歴史家として膨大な『ロシア国家史』(1818—26)を書いたが、その5巻で、モンゴル侵入のなかによいこともあったと述べている。彼によれば、内部に統一がなく、敵にかこまれ滅亡寸前だったロシアに、モンゴルによって「専制」支配体制がもちこまれたことは救いであったというのである。中国やペルシアのような大先進国ですら統治できたモンゴルの軍事技術・統治技術(前述のノルマン人のケースを想起する必要がある)はロシアでも十分に発揮され、その影響下にロシアはやがて強力な中央集権的国家を創出することができたと積極的評価が与えられることになる。軍事、徴税・戸籍、行政のモンゴル方式から学びとることが多かったことは事実でもある。

これに対し、S・M・ソロヴィヨフや、その弟子であるクリュチェフスキイ、さらにソ連の歴史家のほとんどは、モンゴルの支配は間接支配であり、その影響のおよぶ地方も限られ、またその



支配は否定的な結果しか生まなかったと考える。「タタール人はムーア人とは似ていなかった。彼らはロシアを征服したがロシアには代数学もアリストテレスも与えてはくれなかった」というプーシキンの警句を引用し、モンゴルもロシア以上の後進国であって、文明としてロシアに与えるべきものはあまりなかったのだと主張するのである。これらの歴史家はモンゴル征服による人命や富の損失、ロシア人に課せられた税の重荷を強調し、モンゴル支配の時期にアジアとの結びつきが強化された反面、西欧とのつながりが弱められ、ちょうど西側で生れつつあったルネッサンスなどの近代への動きと切り離されたことを歎く。

ロシアが「タタールのくびき」を負わされながら、異教徒の野蛮人をくい止め、結果的にロシアがヨーロッパの防壁となり、西欧文明の進歩を守るとりでとなったと考えるロシア人は多く、またこの「くびき」は、ロシア人を正教教会のもとに団結させ、上は貴族から下は農民に至るまで、ロシア人を共通の宗教的文化的共同体にまとめる方向に向かわせるという逆説的なプラス効果があったと主張されている。スラヴ派の思想家はその意味で、この時代をロシアの「原点」であると考えている。日本の世界史教科書もこの考え方を鵜呑みにしている。<sup>4)</sup>

## ユーラシア国家としてのロシア

スキタイ、サルマタイ以来の多くの遊牧民とロシアとの関係を考えると、ロシアをヨーロッパの国家として西欧側の視点からだけ見がちであった従来支配的だった見方は再検討をせまられて来る。

ロシア人がスラヴ民族の中で最大の人口数をもつ(1億3千万をこえる)ようになった理由は、混血を重ね、生活空間をユーラシア平原に向って広げて行き、優生学的にも資源の面でも多産性を維持し得たことにありと思われる。農耕民族の道を選んだロシア人にとって、この「多産性」と「空間の拡大」は至上命令であった。ロシア人は東方および北東に向って拡散して行ったが、決して原住民の民を根絶やしにすることはなかった。その中に浸透し、原住民をのみこんで行ったのである。先住のバルト、フィン系種族との混血の結果、同じ東スラヴでも原スラヴ的特徴を比較的保っているとされる白ロシア(ベラルーシ)人、ウクライナ人とロシア人とではかなり違う顔かたちになっていると言われている。これにさらにモンゴル・タタール系の要素も加わることになる。ロシアの公たちがボロヴェツとかなり通婚していたことは前にも述べたが、ロシアの貴族たちは仲間うちの競争に勝つためにモンゴル・タタールと競って婚姻関係を結んだことはよく知られている。このようなアジアとの混血の中に、ヨーロッパから見たロシア人の心性の複雑さ、いわゆる「両極性」を読みとることもあながち不可能ではない。

ロシア人の進出の「平和な」性格と対比されるのがモンゴル軍の侵略の荒々しさである。ドーソンの『蒙古史』以来定着したかに見えるモンゴル蛮族説がここから生れる。事実、たとえば1239年のキエフ攻略はすさまじく、数年後にこの地方を通ったローマ教皇の元朝への使節プラーノ・カルピーニは、キエフの町には二百戸ほどしか人家がなく、「大地に横たわる死者の無数の頭

蓋骨や骨と出会った」と書いている。しかし北方ロシアに残されている年代記はキエフの陥落を記録してはいるが、破壊活動や殺戮についてはまったく述べていない。

人文地理学者のラッツェルは、農耕民は労働力として捕虜を活用するが、牧畜民は奴隷をかかえておくほどの労役の必要はなく食糧の余裕もないので捕虜は殺すと説明している。モンゴルの場合、侵入軍が反抗に出会った時、その背後に不安を残さぬために殺戮するという軍事戦略上の理由もあったと考えられる。イスラームの史書などには百万単位の虐殺があったと記録されているが、<sup>5)</sup>当時それほどの人口はなかったから信憑性はうたがわしい。そもそも当時の感覚では敵を皆殺しにするのは誇るべき功業だったのであり、数字を誇大に表現するのはいわば文章表現的コンヴェンションであったので、それをせまい近代化解釈(modernization)でヒューマニズム的心情から批判しても何の意味もない。モンゴル自身が殺戮と破壊を宣伝し、戦わずして降伏させるストラテジーを演出していた面もある。むしろ熟練した職人を連れ去ったということの方がロシアに与えた打撃という点では被害が大きかったようである。

モンゴルはロシアを駆けぬけ、ところどころでかなりの破壊を行ったが、無傷の都市も多かったし、破壊された町も復旧・再建されたことを示す証拠がある。<sup>6)</sup>モンゴル軍がポーランドからハンガリーにかけて転戦しているさなかの1240年、ノヴゴロドの公であったアレクサンドル・ネーフスキイがドイツ騎士団に勝利をおさめたことは、モンゴルの侵略がロシアを壊滅させていなかったことのよき証拠になる。

ウクライナの歴史家コストマーロフ(1817-85)は、「タタール支配下の奴隷状態において、ルーシは自己の統一を見出した。自由の時代〔キエフ時代〕にはそれはまったく考えもつかなかったことである」と書いているが、離合集散をくり返していたロシア人に民族、国家の統合というイデオロギーを与えたのはモンゴルに他ならなかった。モスクワ公国は、のちに見るようにキプチャク・ハン国(ジョチ・ウルス)を継承するユーラシア国家として、東方に向かって拡大することとなる。

先ほどもふれたが、モンゴル・タタールのような後進国の支配に甘んじたからロシアは後進国になったという意見がある。ところがイスラム世界から見ると、「ルス」と呼ばれたロシア人の祖先は「アッラーの創造物の中で最も不潔な人びと」であったとされている(9世紀のイスラム側資料)。イブン・バットウータはロシア人たちの住む北辺を闇黒の地とみなしていた。もっともイスラム側から見た「ルス(つまりルーシ)」はスウェーデン・ヴァイキングも含んでおり、コンスタンティノーブルやイスラム世界をたびたび攻撃したルスの中核にはヴァイキングがいたはずである。

## モンゴルの影響

モンゴル侵入後間もない頃、北西ロシアを侵略したスウェーデン軍やドイツ騎士団軍を打ち負かしたアレクサンドル・ネーフスキイについては前にも触れたが、(彼はネヴァ河畔でスウェーデン

軍をやぶったために、ネーフスキイ〔ネヴァの、の意〕の名を得た)、彼はロシア教会によって聖列に加えられ国民的英雄となった(ピョートル大帝は彼の名を記念する大修道院を建てたが、ここを起点とする大通りがペテルブルクの有名なネーフスキイ大通りである)。スターリン時代、彼の国民的英雄としてのイメージが復活したことはよく知られている。プロコーフィエフの音楽で有名な1938年製作のエイゼンシュテインの映画『アレクサンドル・ネーフスキイ』は独ソ戦開始直前のソ連で、愛国的情熱をいやが上にも高めることに貢献した。

アレクサンドル公の業績をたたえた『アレクサンドル・ネーフスキイ伝』(1300年頃)は軍記物と聖者伝をいっしょにしたような作品であるが、作品として成立したのちも書き写されるたびに加筆され、今日伝わる写本にはそのようにしてくわえられた後代の要素も加わっている。この作品では西側に対する勝利がもっぱらたたえられており、キプチャク・ハン国への臣従についてはあいまいな記述しかない。

前述したようにモンゴル支配は間接的であると考えられていて、事実、ロシア諸公は政治的権威を保っていたが、その支配権を維持するためにはその裏づけとなる勅許状(ヤルルイク)が必要であった。それを得るためには、ハンの首都へ危険で屈辱的な旅をする必要があった。キプチャク・ハン国の首都サライへ伺候する場合(北ロシアからだとして1250キロ)はまだよいとして、大ハンの居るカラコルムまで行かなければならないこともあって、そのめにはさらに4500キロを加えなければならなかった。<sup>7)</sup>アレクサンドルの父ヤロスラフはバトゥの召喚に応じて1242—43年にサライにおもむき、息子のひとりコンスタンチンをカラコルムに送っているが、彼自身もカラコルムに行く破目となり、そこから帰国する途上死亡する。モンゴル・ウルス内の政治的争いにまきこまれその犠牲となって毒殺された可能性もある。諸公のハン国参りは常に危険にみちた旅であった。アレクサンドル自身四度もサライに行っており、そのうち一度はカラコルムまで伺候している。しかし父の死に関してもこのハン国参りについても『アレクサンドル・ネーフスキイ伝』には何の記述もない。

歴史家S.M.・ソロヴィヨフによれば、1236年から1462年の間にタタール軍の侵入は48回におよんだという。徴税への反抗や、謀反に対する懲罰という意味合いも合ったが、ロシアの公自身が自分と敵対する勢力を打ち負かすために招くことも多かった。アレクサンドル・ネーフスキイも弟アンドレイとの争いに際してタタール軍を介入させ、アンドレイはタタール軍にやぶれてスウェーデンに逃れるが、このことについて『ネーフスキイ伝』は何も語っていない。ネーフスキイの対タタール恭順策は徹底していて、1257年キプチャク・ハン国による課税台帳作成のための戸口調査に対して暴動が起きると、彼はそれを鎮圧し、この暴動に加担した息子を罰している。このようなアレクサンドルの行動は当時の状況からみて他に選択肢のないやむを得ないものであったとする見方が一般的であるが、タタールのくびきは、大公の位を確かなものとしたい指導者の手によって直接民衆に押しつけられていたことも事実である。

アレクサンドルの死後、彼の末子ダニールがついだモスクワ公国と、アレクサンドルの弟ヤロスラフが支配するトヴェーリ公国が対立する。この対立はその次の子の世代にまでもち越され

るが、ハンの力をたくみに利用したモスクワが生き残り、のちのロシア再興の中心となる。諸公国がハンに納める税の徴集を一手に引き受け、経済力をたくわえ、そのため「金袋(カリター)」というあだ名を得たイヴァン1世(ダニールの子)はハンへの臣従をもっとも巧妙に利用した人物である。

イヴァン1世(カリター)の孫ドミートリイが位を継いだ時、彼は僅か9歳であったが、有能な府主教アレクシイミトロポリトの攝政のもとで危機を乗り切った。内戦状態にあってロシアの内政に以前のようには計画的・組織的に介入する力を一時的に失っていたキプチャク・ハン国の旗頭の一人である軍指揮官ママイが、リトアニアの支援をとりつけてモスクワを攻撃したのが1380年のことである。ドミートリイはリトアニアの援軍が到着する前にドン川方面に進出し、ドン川のかなたのクリコーヴォ・ポーレレ(嶋しづの原)でタタール軍と一戦をまじえ大勝をおさめ、この軍の先頭に立ったドミートリイはドンスコーイ(ドン川の)という名をもって呼ばれるようになった。

この勝利は「タタールのくびき」からの解放の決定的な第一歩とされた。ロシア人にとっては独立への希望の芽生えであり、この戦いをテーマにした14世紀末の叙事詩『ザドンシチナ』(ドン川のかなたの物語)には「さかんなるよろこびはルーシの国にあまねく、ルーシのほまれは諸国にひびけり。又、邪教のタタール、あしき回教のともがらには、恥辱と滅亡と訪れたり」とうたわれ、この勝利はその後もロシア人の愛国心のよりどころとなった。

しかしクリコーヴォ・ポーレの勝利はただちにロシアの独立につながるものではなかった。(この戦いについては同時代の各国間の外交文書にはまったく言及がなく、それほど国際的には重視されていなかったようである。)それどころか、ママイを倒しハンの位についたジョチ家直系のトフタマイシ(在位1380—98)はモスクワの町を焼き払い、ロシアへの支配権をとり戻した。<sup>8)</sup>しかし一度とは言えタタールと戦って勝利した経験はその後の歴史にとって重要なファクターとなった。ドミートリイの遺言状(1389)は、ハン国の支配がゆらぐ時には貢納を停止すること、国土を子供たちに分割することをやめ長子により多くの権限と土地・財産を与えることを指示したが、これは大公権の強化、モスクワ公国の発展を考えると、きわめて意味のある指示であったように思われる。

ロシアのタタール臣従の歴史は、ロシア＝モンゴル・タタール間の緊密で錯綜した関係を生み出した。モンゴルとの通婚は広く行われ、仲間との競争にやぶれたモンゴル貴族がルーシの町に避難して来る場合もあり、モンゴル・タタール系の人物がロシア史上重要な役割を演ずるケースがよく見られる。ヤロスラーヴリの公となったフョードルは13世紀半ばにハンの娘と結婚しているし、モスクワ大公ユーリイ3世(ダニールヴィチ)(1303—25)はハンの妹を妻としていた。キプチャク・ハン国に衰えが目立ち、モスクワ公国が興隆し始めた14世紀後半以降になると、モンゴル・タタールの貴族が大量にモスクワに流入して来るようになる。彼らの多くはギリシア正教に改宗し、今度はモスクワに臣従するようになる。

ドミートリイ・ドンスコーイの子ヴァシーリイ1世の死後、その子ヴァシーリイ2世が9歳で即位するが、伯父のユーリイが従来慣習に従って継承権を主張した。そのため約20年にわたる内

戦が続き、ペストの大流行、凶作、相変らず続くタタールの侵入と重なってロシアの人口は急激に減少し、国力は著しく衰えた。不幸中の幸いなこととして、リトアニア、リヴォニアなどロシアをねらっていた外国勢力が国内事情で干渉して来なかったということは特記しておくべきであろう。この頃奇妙な事件が起きる。ヴァシーリイ2世がチンギス・ハンの子孫であるウル・メフメットにひきいられたタタール軍にやぶれ捕虜になった時、莫大な身代金を払い、年代記によると「神と彼ら(ヴァシーリイ2世とタタール)だけが知っている他の義務」を負う約束をして自由の身となった。ヴァシーリイは多数のタタール貴族を連れ帰り、重要な役職につけたり領地を与えたりした。ヴァシーリイはのちに、従弟(叔父ユーリイの子)のドミートリイ・シェミャーカにとられえられ眼つぶしの刑にあい(そのためヴァシーリイ盲目公〔チョームヌィ〕と呼ばれた)追放されるが、それを救ったのは彼の忠実な支持者であったタタールである。のちにヴァシーリイはヴォルガ下流オカ川沿いの土地に、ウル・メフメットの子カシムのために小さな従属的な公国を建てた。いわゆるカシモフ帝国である。これが例の「義務」のひとつだったと推測することもできるが、このカシモフ帝国の支配者セミョーン(シメオン)・ベクブラトヴィチがイヴァン4世(雷帝)時代、1575年から翌年にかけて一年近くツァーリに祭り上げられるという一見奇妙な出来事が起きている。

イヴァン雷帝の退位と、このチンギス・ハンの末裔の即位という事件は、ツァーリの狂気とか、政治的ジョークを演出した仮面劇であったとか解釈されることがある。このような解釈は、多くのロシア史家による「近代化解釈」の欠陥をよく示している。このシメオンの即位には今日的な「常識」によっては判断しがたいあいまいな性格があるように見え、それゆえそこにさまざまな象徴性を読みとることができる。そしてこの「象徴性」こそ同時代の人間にとっては誰の目にも「明かな」意味をもっていたと考えられる。これは皇帝直轄領(オプリーチナ)創設をめぐる旧貴族層の反対に直面したイヴァン雷帝が演じてみせたパフォーマンスであった。ジョチ家の血統をひくシメオン(モンゴル名はサイン・ブラト)を玉座につけ、全ルーシのツァーリ(ハン)に推戴しておいてから、翌年譲位を受けるという形をとった。「チンギス統原理」に従えば、チンギス・ハンの血統の男子でなければハンにはなれないことになっているので、モンゴルの王子から禅譲を受けたという形式をとって自らに正統性を付与したことになる。この手続きによって、「黄金のオルダ」(ジョチ・ウルス)の継承国家であるカザン・ハン国、アストラハン・ハン国、クリミア・ハン国と並ぶ資格を得たことになり、ロシアはやがてこれらのハン国を粉碎し、モンゴル帝国に代るユーラシア帝国となって行く。

イヴァン雷帝の祖父イヴァン3世がビザンツの皇女ソフィア(ゾエ)・パレオロギスと結婚したということも、ビザンツの遺産をこの新興ロシア国家がひきついだということを世界にアピールする「象徴的」行為であった。かつての支配者であったモンゴル・タタールの最も高貴な血統に属するシメオン(今では忠実な家臣であるが)の権威を自分のあやつり人形の道具として登場させるという行為は、モスクワがモンゴル・タタール大帝国の継承国家であることを世界に宣明する手のこんだ演出であり、当時モスクワに滞在していた外交官たちはこのことをよく理解して

いた。

## 大国への道

16世紀と言えば誰でも文化の華開いたルネッサンスを思い浮かべる。しかしロシアにとってこの世紀は、イヴァン雷帝(在位1533—84)に代表される悲劇的な時代であった。中央集権的統一国家を形成する過程で、専制的権力の確立を目指すツァーリと封建的貴族が対立する。この時代、自らの政治的・宗教的イデオロギーを明確にかかげる個性的な人物が輩出するが、イヴァン雷帝自身がこの時代最大の政治的ジャーナリストであった。彼には開明的な側面もあり、実利を求めていることではあるが、西欧の文化・文明に対し開かれた態度をとり、イギリスの商人を招き、外国の技術者・医者と呼びよせ、西ヨーロッパ諸国との交易を行おうとした(佐口透氏の名著『ロシアとアジア草原』において明らかにされたように、モスクワ国家の東方貿易——ロシアのシルクロードは未曾有の活況を示していた。1570年のエリザベス女王あてのイヴァン雷帝書簡には、東との貿易だけで十分であって、イギリスの商品がなくてもロシアは不自由ではない、と述べている)。

しかし、イヴァン雷帝はプスコフやノヴゴロドのような、西欧と深いつながりのある自由な都市国家を破壊し滅亡させ、西側への侵略戦争を繰り返したため、ロシアはヨーロッパから次第に孤立し、ルネッサンスがロシアに入ってくる道は閉ざされてしまった。西側への道は当時の大国、ドイツ、ポーランド、リトアニアなどによってはばまれ、南側では前述のようにクリミア・ハン国がまだ強大な力を保っていた。中央アジアにはキルギス、カザフのような強大な遊牧民族がいた。

唯一真空地帯として残されていたのがシベリアであった。当時世界で無人に近い真空地帯として残されていたのがアメリカとシベリアであった。この広大な地域を獲得した二つの国がのちに超大国になったことを考えると、この世界史上最大の獲得物であったシベリアの重要性がわかって来る。ロシアにとって積年の悩みの種であったカザン、アストラハンの両ハン国を苦難の末征服したイヴァン雷帝自身は、東方征服にあまり乗り気ではなかった。シベリアに向うロシアに立ちだかるシベリア・ハン国と事を構えたくなかった。それに極寒の地シベリアを征服する意味はあまりないというのが当時の考えだった。ところが、そこに毛皮という特別な「世界商品」が重要な意味をもつようになり、従来人があまり立ち入らなかった極北の森林地帯が俄然人びとの関心を引くようになったのである。カナダの歴史家は、ビーヴァーの毛皮を求めて人びとが移動するうちにカナダという国ができ上ったというような言い方をするが、ロシアの場合もグリゴリー・ストローガノフという商人がイヴァン雷帝の勅許を得て西シベリア開拓に着手したところからシベリアの領土獲得が始まった。ストローガノフはコサックの頭目エルマークを中心に1650人の私兵からなるシベリア・ハン国遠征隊を組織し、この僅かな手勢でこの国の首都をおとしめられてしまう。

このことをきっかけに始まった東方への版図拡大には紆余曲折はあったが、ロシアは急速なスピードで進出して行き、計算によると一日平均130平方キロメートルずつ拡大して行ったことになる。世界がいわゆる「大航海時代」に入り、海に人びとの注意が向けられていた時、ユーラシア北方では誰も気づかぬうちに巨大な内陸の帝国が生れつつあったのである。ロシアはオホーツクに到着したあと、1799年にはアラスカを領有するまでになる。(この領土拡大を支えたのは、長く続いた毛皮ブームであり、レザーノフの日本来訪もこのブームと深くかかわっている。)

イヴァン雷帝時代、専制大国ロシアの基となる条件は整えられたが、イヴァンの死後にはピョートル大帝(1世)登場まで苦難の百年以上の年月が残されることになる。その苦難の原因のひとつはイヴァン雷帝その人の人格にあった。長子イヴァンの妊娠中の妃エレーナがだらしな性格好をしているという責め、杖で打ちすえ、それが原因で流産してしまった。長子イヴァンは妻を守ろうとして父の両手をおさえたため、怒った雷帝は自らの子を打ち殺してしまったのである。そのため彼はよき後継者を失い、知恵おくれの次男フォードルが位を継ぐことになった。リュエリックの長い血統はイヴァン雷帝の残忍な行為の結果やがて絶えることになる。

—丁—

#### 註

- 1) 川端香男里「スラブ文化における土着と影響」講座スラブの世界第1巻『スラブの文化』(弘文堂、1996) 所収 p.96-98
- 2) ヨーロッパとアジアの境界とされているウラル山脈とカスピ海間の地域は、昔から「アジアの門」と呼ばれ、ユーラシア大陸と「ヨーロッパ半島」との結節点にあたる。このアジアの門を東から西へ通過して行くアジア系諸民族は次々と西方へ侵攻して行ったが、「半島」にあたるヨーロッパは常にこの東からの民族の圧迫を脅威と感じ続けて来た。ヨーロッパ人の意識の中にあるこの「東方からの脅威」の中には当然アラブも日本も入って来ることになる。トマス・インモース『ヨーロッパ心の旅』(原書房1995) p.4-5参照。
- 3) ロシア人の学者たちがきわめてロシア的な視点で、つまり最初から視界に枠づけをして論じていることとは別に、スウェーデン人側はロシアの建国をヴァイキングの東方経略の歴史の一部として記述する権利をもつであろう。(フレデリック・デュラン『ヴァイキング』(白水社 文庫クセジュ 1980 p.54-64)。またウクライナ史の一部としてキエフ・ルーシが論じられる場合にもまったく別の視点が取られることがある。(『ロシア・ソ連を知る事典』(平凡社 1989 p.50「ウクライナ」『歴史』の項目(中井和夫氏担当)は次のようなウクライナ側の見解を祖述している。「中世初期のユダヤ人国際商業団ラダニヤと対抗したルーシ・ハーン国は、イティリを首都としたハザル・ハーン国のカバル革命(830年代)によるハーン亡命によって成立した。ルーシ・ハーン国はボルガ時代(839—930)、ドニエプル時代(930—1036)、キエフ時代(1036—1169)の3時期に分けられる。そのうち10—12世紀後半はキエフ・ロシアまたはキエフ・ルーシとも呼ばれる…」)
- 4) 最近の出版物、たとえば『世界の歴史と文化——ロシア』(新潮社 1994)にも「ロシアが屈辱的なタールの轡を堪えたことによってヨーロッパ諸国がモンゴルの支配を免れたことは銘記されている。この意味では「ヨーロッパよ、傲るなかれ！」なのだ」(p16)と書かれている。史上初めて、ユーラシア世界がひとつの歴史世界として誕生し、pax Mongolicaがあまねく行きわたる文明世界を作ったことの意義は、残念ながらロシア人にも、そして日本のロシア研究者にも理解されていないのである。少なくとも西欧中心主義的視点にとらわれることがなければ、ロシア帝国の誕生がモンゴル帝国成立以後の一連の事象と深くかかわっていることは理解できよう。

- 5) 杉山正明『モンゴル帝国の歴史』上(講談社 現代新書 1996 p.52)
- 6) デイヴィッド・モーガン『モンゴル帝国の歴史』(角川選書 1993 p.142-145) モーガンはJ.Fennel《The Crisis of Medieval Russia 1200-1304》1983を引用して論を進めている。
- 7) 『世界歴史大系——ロシア史1』(山川出版社 1995 p.152)
- 8) 「タタールのくびき」は1480年に終わったと、どのロシア史の教本にも書いてある。イヴァン3世の時代、アフメット・ハンが自立傾向を示すモスクワを攻撃しようとしてオカ川支流のウグラ川をはさんでモスクワ軍と何週間も対峙したが、戦わず退却した事件があった。予定していたリトアニアからの援軍が来なかったことが原因であったとされている。この「ウグラ河畔の対峙」として知られる事件は、タタールのくびきの終焉を象徴するものとして年表にとりあげられているが、事態がこのことを契機として大きく変わったわけではない。黄金のオルダ(ゾロターヤ・オルダー)—Golden Horde—[金帳汗国]と呼ばれるキプチャク・ハン国は1502年まで存在し、モスクワの支配権をその時まで放棄していない。ジョチ家のハーッジー・ギライは1449年 ポーランド=リトワ(リトアニアとポーランドの連合国家)の後援のもとでクリミア・ハンとなるが、その子メングリ・ギライ・ハンが黄金のオルダのハンの位を1502年に奪った。これをロシアの歴史家はキプチャク・ハン国の滅亡と呼ぶが、黄金のオルダはクリミアと合体しかえて強大になったと言える。1571年にはクリミア・ハンのデウレット・ギレイがモスクワを急襲し攻略し貢税を課すという事件があり、これ以後もモスクワは貢税の義務を負うことになる。「黄金のオルダ」の実質的な滅亡は、1783年エカテリーナ2世がクリミアを併合した時のことで、バトゥが侵入して以来546年後のことである。